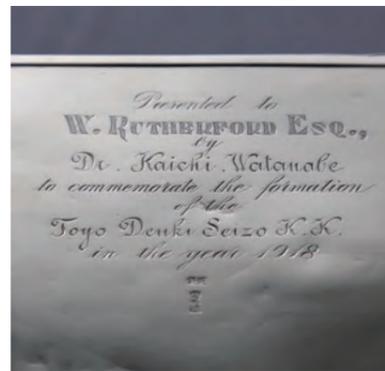


海を渡ったシガーボックス

～初代社長・渡邊嘉一からの贈り物～



シガーボックス



(和訳)
1918年の
東洋電機製造株式会社の
創立を記念して
渡邊嘉一博士より
W. Rutherford殿へ贈る

裏面のメッセージ

英国からの突然の便り

2016(平成26)年8月末、当社に英国から1通のEメールが届いた。そのメールには、当社が技術提携を受けた英国のディッカー社の役員 Walter Rutherford氏に、当社設立の記念として初代社長の渡邊嘉一が贈った銀製のシガーボックス(葉巻入れ)の写真が添付されており、当社の創立100周年にあたり、そのシガーボックスを貸し出してもよいという申し出であった。

送られてきた写真の1枚に、シガーボックスの裏側のメッセージを読み取れるものがあり、そこには確かに「Dr. Kaichi Watanabe」の名前や当社名が見て取れた。

メールのやりとりを重ねるうちに、差出人のCharles Oglethorpe氏とその令嬢のAlexandraさんは日本の文化や産業遺産に造詣が深く、英国のアンティークショップなどで日本に関連する工芸品の類を収集するうち、偶然にも今回のシガーボックスを手に入れるに至った経緯を知ることができた。

2017年11月、Oglethorpe一家はこのシガーボックスを携えて来日し、東京・八重洲の当社本社にて寺島社長と面会した。その際お預かりしたシガーボックスは、2018年5月16日に東京・日比谷の帝国ホテル東京にて開催された創立100周年記念祝賀会の会場に、当社創立の由来とともに展示され、多くの来場者の関心を引いた。



Oglethorpe一家との面会(2017年11月)

100年の時を越えて

シガーボックスは、箱の本体は純銀製で、内部に木製の内貼りがなされ、蓋には柴を背負って歩く人物とともに、金工師「竹田竹義」の銘がある。裏面には「宮本造」の刻印があるが、これは現在も東京・銀座で銀製品を扱う宮内庁御用達「宮本商行」の製品であることの証であった。

明治時代以降、日本も海外との交流が増えるにつれて、このシガーボックスのように技巧を凝らした贈答品が数多く製造されたようである。渡邊社長もディッカー社の取締役のために、名入りの贈答品を宮本商行であつらえたのであろう。



蓋部分

100年の時を越えて、偶然にも日本に一時里帰りしたシガーボックスは、今の当社を、そして今の日本の姿を、どう眺めるであろうか。